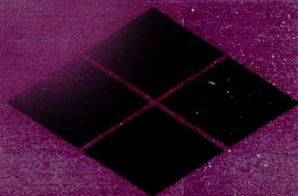


文学・昭和十年前後

平野 謙



文学・昭和十年前後

平野 謙

文藝春秋

文学・昭和十年前後

昭和四十七年四月二十日 第一刷

定価八〇〇円

著者 平野 謙

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二二一

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁の場合はおとりかえ致します

©1972 Ken Hirano

Printed in Japan

1095-332190-7384

文学・昭和十年前後

■ 目次

小林多喜二の死	5
作家同盟の解散	17
最大の敵・林房雄	29
亀井勝一郎の登場	43
同人雑誌《批評》について	57
《現実》の創刊	67
『転形期の文学』	75
シェストフ受容	91
痴人の夢	101
白鳥と秀雄	113
『私小説論』以前	125
人民戦線のこと	137
独立作家クラブのこと	147

社会主義リアリズム論争

《世界文化》のことなど

中間の締めくくり

昭和文学の意味

私小説と共産党

行動主義文学論

《人民文庫》の問題

散文精神論の一深化

転向文学論

続・転向文学論

久保栄と中野重治

『私小説論』の周辺

小林秀雄と中野重治

《文学界》の同人

あとがき

装
幀

栗
屋

充

小林多喜二の死

昨年、私は現代日本文学史のなかの昭和期の概観をまとめる機会があったが、いろんな事情でそれは意にみたぬまま出版されねばならなかった。たとえば、あの小説をもう一度読みなおしたいと思いつながら、時間の関係でそれができないまま、私のレディメードの知識で間に合わせた、というようなところがあちこちにできた。いま与えられた機会を倖に、昭和十年前後の文学をもう一度納得のゆくまで辿りなおしてみたい、と思う。なぜ昭和十年前後に焦点をあわせるかといえば、ここに現代文学のほとんどすべての問題点が出揃っており、実作の上でもっとも豊饒な一時期だったことを、昭和期全体を概観してみても、改めて確認しなおしたからである。

しかし、私は自分の才能の限界にもとくに見極めがつき、いまさら立派らしい文学史を書くとは思ってはいない。すこしばかり自分の気に入るように、あちこち気ままに散歩するようなつもりで、もう一度資料をひっくりかえしてみたいのである。ごくおおすじの見透しだけで、こ

まかいことはそのときどきにきめてゆきたい。むかしから私は貧乏性で、生活をたのしむことを知らず、仕事をたのしむことを知らなかったから、今度は許される範囲内で、少々わがままな仕事が出来てみたいのである。

昭和十年前後の文学を調べなおす入口としては、いろんな題目が考えられる。いま私は小林多喜二の死という題目をえらんでみた。この題目はどう考えてもたのしいものではあり得ないが、ここからはいるのがやはり私には自然なのである。

よく知られているように、小林多喜二は昭和八年二月二十日午後七時すぎ、築地警察署で殺された。二月二十日の正午すぎに赤坂の福吉町附近で逮捕され、その夕方には早くも殺されてしまったのである。当時の新聞はその「急死」の原因を心臓マヒと発表したが、すこし事情を知っているものは、みなそれが拷問による虐殺であることをうたがわなかった。

その間の経緯を、主として手塚英孝の評伝『小林多喜二』に拠りながら、まず略述してみたい。昭和六年十月二十六日に日本プロレタリア文化連盟（コップ）が組織された。このコップという組織は、当時すでに合法部面での活動をうばわれていた蔵原惟人が主として提唱したもので、プロレタリア文化運動全体を文化サークルを基礎として再編成しようとする一種の中央協議会組織だった。この結成についても、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）のなかでは窪川鶴次郎や勝本清一郎が反対したりして、いろんないきさつを経てやっと結成されたのだが、その経緯については一切省略したい。私はここでプロレタリア文学運動を語るのが目的ではなく、いわばそれが運動として衰滅してゆく過程を一背景として、昭和十年前後のいわゆる文藝復興期とよばれる

エポックが成立した事情を物語りたいのである。その敗亡のきっかけとなったもつともショッキングな歴史的事実が、小林多喜二の死という文学史上未聞のできごとにほかならなかった。

ここで注意すべきは、コップの結成がいわゆる満洲事変の勃発と相前後している事実だろう。

侵略戦争にまで国内のゆきづまった社会情勢を打開しなければならぬ国家権力が、中央集権的なプロレタリア文化運動の再編成を、そのまま黙って見送るテはない。コップ所属の各文化団体に集中的な弾圧がくだされたのも、いわば当然のなりゆきだった。昭和七年三月二十四日に、山田勝次郎、小椋広勝、平田良衛、寺島一夫らのプロレタリア科学研究所（プロ科）の人々が逮捕されたのをきっかけに、三月から四月にかけて、小川信一、窪川鶴次郎、小野宮吉、壺井繁治、今野大力、戸台俊一、中野重治、村山知義、生江健次、蔵原惟人、宮本百合子らがつぎつぎと検挙されたのである。

このコップ弾圧に取材した作品としては、宮本百合子の『一九三二年の春』および『刻々』がすぐれたドキュメントとなっている。宮本百合子は四月七日の夕方動坂の自宅で逮捕された。当時、宮本百合子はまだ中条姓を名乗っていたが、昭和七年二月に当時の非合法共產党の中央部員だった宮本顕治と結婚したばかりである。宮本顕治は昭和四年に『改造』の懸賞論文に小林秀雄と覇を争い、宮本の『敗北の文学』という芥川龍之介論が一席となり、小林秀雄の『様々なる意匠』は二席に落ちた。このことは、昭和四、五年ころの文壇の新興勢力の比重をおのずから指ししめす話柄として、のちのちまで語り草となった。当時はプロレタリア文学が文壇ジャーナリズムの上でも圧倒的に優勢であり、モダニズム文学はとてもプロレタリア文学の勢力に及ばなかつ

た。そのとき、宮本顕治はまだ東大経済学部に在籍する一学生だったはずであり、その後、長大な片上伸論や藝術的価値論や広津和郎を中心とする同伴者作家論などを発表して、雋英なプロレタリア文藝評論家として一部に注目されつつあったが、文壇的にはそんなに名のとあった文藝評論家というわけではなかった。そのなかば無名の一評論家とソヴィエトがえりの中条百合子との結婚は、当時新聞紙上にも花々しく報道されて、ジャーナリズム上の一話題となった。すでに大正五年九月に一流雑誌《中央公論》に処女作『貧しき人々の群』を発表して、一躍天才少女の名をうたわれていた中条百合子が主役であって、宮本顕治はそのひきたて役にすぎなかった。中条百合子は宮本顕治よりほぼ十歳の年長だった。私たちも彼らの結婚をひそかに噂しあって、よく結婚したね、といいあったものである。この場合は、当時のジャーナリズム上の評判とは反対に、宮本顕治のような春秋に富む有為の青年が中条百合子のようなオトコ女みたいな年上のオバチャンとよく結婚する気になったもんだ、というほどの意味である。無論、私どもは彼らの結びつきの純粹な愛情をうたがいはしなかったが、それだけにその結合がすこし突飛にみえたことも事実である。後年、といっても宮本顕治が無期徒刑囚として獄につながれ、戦争下の悪気流のなかに唯一のうしろ楯となって孤軍奮闘する宮本百合子の噂をきいたとき、再び私どもは彼らの結婚について語りあって、宮本顕治がよく結婚の撰択を誤まらなかったことに、改めて感服しあったことがある。事実、宮本百合子の献身的なうしろ楯がなかったなら、治安維持法容疑のほかに、いわゆるリンチ共産党事件の直後検挙されて、まがましい殺人容疑者として戦争末期の網走刑務所につながれた宮本顕治は、獄中に落命していたかもしれない。ついでに当時の宮本百合子に對

する私どもの評価についてここに書きしるしておけば、中条百合子と宮本顕治とが結婚したころ、文学者としての中条百合子に対する私どもの評価は、さして高いものではなかった。プロレタリア文学者としての中条百合子はいわば新参者にすぎず、文壇的にいえば、片岡鉄兵などにはじまるいわゆるブルジョア文学者のプロレタリア文学への転換という一流行現象の末端に位するものにほかならなかった。中条百合子のソヴィエト紀行を単行本とした『新しきシベリアを横切る』にみられる新感覚派まがいのモダニズム的な文体など、それだけで到底オーソドックスなものとは認めがたかった。私どもが中条百合子を新しく評価しなおしたのは、プロレタリア文学運動の末期に、不屈の逆襲を決意した彼女の孤軍奮闘ぶりであり、ナルブ解散後のいわゆる転向時代のただなかに、横光利一の『紋章』を辛辣に批判したり、みずからを「冬を越す蕾」になぞらえたその凛烈たるすがたを発見したときである。私どもは彼女の評論集『冬を越す蕾』に熱中するとともに、プロレタリア文学に転換する以前の業績にもさかのぼって、『貧しき人々の群』や『伸子』についておたがいの読後感を語りあったりした。『伸子』のヒロインがアメリカ留学のとき、周囲の反対を押しきって、苦学生あがりの佃というようなバツとしない暗鬱な男と結婚したのはなぜか、というような問題が私たちのあいだで問題となり、徹夜の討論になったりしたこともあった。佃と結婚したのは伸子のヒューマニスティックな同情と一種の反逆精神の現われだという説に対して、そういうみかたは甘い、あれは伸子の性の餓えだ、その衝動の発現が結婚となったまでだ、現に、伸子は佃と結婚したとき、当分子供は産まぬことにしようと約束しているではないか、伸子のような母性型の女性が子供を産みたくないと思うのは、最初から男性としての人間

的信頼に缺けるところがあったからだ、などと私は反駁し、相手はそれこそ盲目的な性愛ではなくて、たがいに成長したいと希うヒューマニズムが根にあったからだ、とさらに反論したのである。ともかくコミュニストとしての中条百合子のめざましい進展と充実に私どもは眼をみはり、いまさら宮本顕治の撰択眼の正しさに服した次第である。昭和十年か十一年ころの話である。

ここで脱線ついでに、当時の私ども仲間のことと私自身のことについて語っておくわがままを許してもらいたい。

私はすでに田舎の中学生のころから文学少年だったが、高等学校のとき、いま藤枝静男というペンネームでときどき小説を書く勝見次郎が寮の同室にいて、同級生に本多秋五がいた。勝見次郎は東京そだちの文学青年で、私も本多も藝術百般にわたる彼の教養に圧倒された。高等学校に入学した翌年の夏休みに、勝見は單身奈良にでかけて、志賀直哉に逢ってきた。私はその勇氣に感心した。そのとき勝見は日吉館にとまっていたが、ナントカというアズマヤを借りていた無名の大学生小林秀雄と知りあった。さらにその翌年の秋休みに、勝見と本多と一緒に奈良に旅行して、志賀さんのお宅にもつれてゆかれた。私が高名な文学者をまのあたりみた最初の経験である。その後、大学生となって東京に移り住んでから、もう一度勝見につれられて小林秀雄を訪ねたところがある。当時、小林秀雄は日暮里か田端あたりにお母さんと住んでいたような気がする。のちに勝見は八王子に住んでいたことがあり、そのとき訪ねていった私をまた瀧井孝作にひきあわせた。今から思えば、その時分勝見は文学上の兄貴分として、私をひきまわして、つきつきと志賀直哉、小林秀雄、瀧井孝作に紹介してくれたものらしい。しかし、小林秀雄を訪ねる以前から私

はプロレタリア文学運動に氣をとられていて、勝負の配慮を大してありがたいことも思わなかった。

私が自発的に文学者を訪問したのは、壺井繁治が最初である。コップが結成され、壺井繁治がその出版部長に就任したことを知って、私は訪問したのである。だから、それは昭和六年十月以降のことになる。私はプロレタリア文化運動の一兵卒としてはたらくたい、と希ったのである。

しかし、みもしらぬ一大学生にすぐ仕事を与えるほど壺井繁治が軽率なはずはなく、私の希いはかなえられなかった。もっとも私も手ぶらででかけたわけではなく、評議会時代からの古い闘士で、たしか三・一五事件の被告だった人の奥さんで、洋裁屋を営んでいた婦人の紹介状を持っていったはずである。私が訪ねたとき、壺井繁治はひとりで朝メシを食っていた。それがミルクと果物とトーストだったことを、プロレタリア作家のくせに案外ハイカラなんだなと思って、いまにおぼえている。同時に、床の間にカーテンが一杯ひかれていて、その裏に雑誌や書籍が積みかさねてあるらしい様子も記憶にのこっている。いつだったかそのことを壺井繁治に話したら、まるで忘れてしまっていたが、カーテンの話をもちだすと、じゃあホントだ、君が来たのは、と壺井は肯定してくれた。訪問のかえりがけに私は谷本清の『藝術的方法に就いての感想』について、あんな立派な論文を書く人が突然あらわれるのは不思議だ、という意味のことを質問のちで述べた。壺井繁治はプロレタリア藝術運動の昂揚がああいう新しい書き手の出現を可能にしたのだ、と真顔でこたえた。私はさもあらんと内心うなずき、それが蔵原惟人の匿名論文だったとは夢にも思いつかなかった。その後、私は本多秋五の紹介でプロレタリア科学研究所の藝術

学研究部会に所属することとなり、そのキャップの新島繁やナルブから研究会に顔をだしていた池田寿夫と知りあいになった。同時に、その部会メンバーだった山室静や故泉充とも知りあいになった。当時はまだ研究所も合法的な事務所を今川小路に持っていたが、プロレタリア科学同盟と改称するところから、コップ所属の各団体は次第に合法性をうばわれて、私たちの研究会なども事務所で開くことが不可能になってきた。当時、藝術学研究部会は叢文閣から《マルクス・レーニン主義藝術学研究》というクォタリイを機関誌として出版していたが、その第三輯だかに新島繁のいいつけで私はみじかい翻訳を発表して、思いがけなく原稿料をもらった記憶がある。私が原稿料と名のつくカネをうけた最初の経験である。

その後、私は池田寿夫と個人的にも親しく口をきくようになり、いま長野県の菊池謙一の奥さんになっている池田夫人とその妹さんたちとも知りあいになった。そこで、池田寿夫が非合法生活にはいるとともに、私もプロ科メンバから抜擢されて、コップ直属の書記局メンバ（？）の一員になったらしい。らしいと曖昧にしかいえぬのは、私は正式にコップ書記局メンバに加えられた、という話を当時誰からも知らされたおぼえがないからである。もし正式の話があったら、私は相当動揺し、考えこんだかもしれない。コップ書記局が共産党と直結して、すでに頽勢にあった文化運動全体を大声叱咤する立場にあったことは、私にも十分のみこめていた。その書記局に所属することは、作家同盟員であることよりもだいぶキケンだった。私はいわば踏みきりの決意ぬきに、ズルズルと半非合法活動にまきこまれる結果となった。私はコップのレポーターとして各文化団体の責任者（？）と定期的に連絡をとった。そのなかでいまでもおぼえているの

は、須山計一と川内唯彦とのふたりである。私は中学初年級に『文章倶楽部』を愛読していたころから、コマ画の投書家だった須山計一の名を知っており、その後『文藝時代』の漫画などにも須山計一の名をみかけるようになって、特別の親しみをいだいていた。そういう個人的な親しみを須山にもうちあけたためか、須山が本郷の私の下宿さきに遊びにきてくれたこともある。戦後、須山計一がその当時のことを回想した随筆を『新日本文学』に発表していて、私も当時の記憶を新たにしたことだった。また、私は臨時の助手のような格好でコップ機関誌『プロレタリア文化』の編集をつたひ、その校正をひとりでしたこともある。神保町あたりのうすぎたない印刷屋で、いつ警察にふみこまれるかもしれぬ恐怖心とたたかいながら、はじめての経験の校正をしたのである。表紙の「プロレタリア文化」という題字も活字組の無愛想なものだったのを、私が苦心サントンしてやや装飾ふうの「プロレタリア文化」という書体書きかえ、それを凸版にしてもらうよう印刷屋のオヤジに頼みこんだこともある。そこで山崎利一署名の読みにくい乱暴な原稿が、宮本顕治のものであることも、私ははじめて知った。私はこの原稿を特別に大事にしまっておいて、昭和十年代になってから宮本百合子に贈ったおぼえがある。「まア」といったきり、その原稿にみいったままの宮本百合子の顔つきを、私はいまに忘れない。また、白浜蹴という匿名が杉本良吉のそれであって、白ハ負ケルをもじったものだ、笑いながら池田寿夫がおしえてくれたこともある。その杉本良吉とその奥さんの哀切なすがたは、佐多稲子の『歯車』にも近作『灰色の午後』にも写しだされているが、私は連絡をとった記憶がない。杉本良吉の奥さんの弟だった杉山英樹とは、昭和十年代に『現代文学』という同人雑誌で一緒になり、かなり親しくしたが、

私から杉本良吉や奥さんの話をもちだした記憶もない。杉山英樹は戦時中に『バルザックの世界』という大きな本を中央公論から出版して、戦後まもなく腎臓結核で死亡してしまった。

こういう個人的な回想をつづければキリがない。昭和十年前後には私はそういう仲間たちと、もう一度くりかえせば、勝見次郎、本多秋五、山室静、泉充などときおり文学談をかわしていた。ただし、勝見は左翼のシンパ程度で、千葉に住んでいたし、本多は国許にひっこみ、山室はアンドリュース商会(?) という外資会社に勤めていて、大体私は泉充といちばんよくつきあっていた。泉は戦後、大江健三郎が本誌の長篇でふれていたエヒノコックスという奇体な寄生虫にとりつかれて、ほとんど志をのべる違もなく死亡した。しかし、中国でとりつかれたその寄生虫のために死んだ泉は、戦病死の扱いをうけることができなかった。《現代文学》に掲載した芥川龍之介論がほとんど唯一の遺稿となった。それはマルクス主義文学理論の呪縛からの解放を告げる、一青年の苦闘の記録にほかならなかった。

宮本百合子の『一九三二年の春』によれば、昭和七年四月七日に国府津から帰京して、東京駅で別れたまま、百合子は逮捕され、頸治は地下にもぐった。結婚後二カ月にみたぬときである。

彼らが国府津へゆく直前の四月三日に、小林多喜二が彼らの家に遊びにきて、かえるとき、中折帽子をかぶって、小柄な着ながしすがたに風呂敷づつみをさげた格好を宮本夫妻にみせて、「どうだね、こんな風は」と聞いた。「村役場の書記めいいいよ」と宮本頸治がこたえた。この間答はすでにそのとき彼らが身辺の危険を察知して、地下にもぐる決意を固めていたことを証している。小林多喜二はそのまま奈良までかけて、かねて私淑していた志賀直哉に逢い、帰京する